御盆の棚経を終えて　～洞谷記に学ぶ～

加茂法話会　令和五年八月二十二日

一、道元禅師　一二〇〇(正治二)年～一二五三(建長五)年　五四歳　五一代

瑩山禅師　一二六四(文永元)年～一三二五(正中二)年　六二歳　五四代

二、洞谷記の教えから

■洞谷記は、一三一二(正和元)年～一三二五(正中二)年までの洞谷山永光寺建立（一三一二年）の記録をベースにしつつ、日常の出来事を日記風に示したもの。

＊總持寺は、一三二一(元亨元)年に開山。

■洞谷記中　「洞谷山永光寺盡未来際置文」より

能州酒井の保、洞谷山は、平氏、酒匂の八郎頼親の嫡女、法名は祖忍、清浄寄進の浄処なり。故に紹瑾、一生偃息の安楽の地と為し、来際、瑩山が遺身安置の塔頭所と為さん。是れを以って、①自身の嗣書、②先師の嗣書、③師翁の血経、④曽祖の霊骨、⑤高祖の語録を、当山の奥頭に安置して、此の峰を名づけて五老峰と称す。

①瑩山禅師　②永平寺三世義介禅師　③永平二世懐奘禅師　④道元禅師　⑤如浄禅師

⑥檀那を敬うこと仏の如くすべし。戒定慧解、皆な檀那の力に依って成就す、云々と。

⑦然る間、瑩山が今生の仏法修行、此の檀越の信心に依って成就す。故に尽未来際、此の本願主の子子孫孫を以って、当山の大檀越、大恩所と為すべし。⑧是の故に、師檀和合して、親しく水魚の昵きを作し、来際一如にして、骨肉の思いを致すべし。用心、此の如くならば、実に是れ当山の師檀為るべし。縦使、⑨難値難遭の事有るも、必ず和合和睦の思いを生ずべし。

東龍寺住職　渡邊宣昭　合掌